

氏間和仁さん

(広島大学大学院教育学研究科准教授)

見えづらさを抱える子供たちの教育は？

氏間さんは、視覚が十分に使えない子供たちの教育に携わっている。タブレット端末を使った新たな教育の可能性など、いまの視覚障害児たちの学習のスタイルと、障害者理解教育について聞いた。

見えづらにもいろいろある

——どのような研究をされているのですか？

見えづらい人たちの生活や学習上の困難を科学的に解明して、その解決策を提案しています。基礎研究としてはデジタル・リーディング（画面上で文章を読む）。パソコンやタブレットなどをどう調整すれば弱視の人たちが自分の能力を発揮できるかという研究です。

また、授業や学習の場面でどう活用していけばよいかを、教育相談を通して伝えたり、ときには、視覚障

害児や発達障害児たちと一緒に勉強したりしています。全国の学校へ行って現場の先生に指導することもありますし、広島大学では教育相談や、弱視の子供や発達障害の子供をそれぞれ集めて学習支援などもしています。

——発達障害児でも見えづらさを抱えている子供が多いのですが、弱視の子とどう違うのでしょうか？

発達障害と弱視による文字の見にくさは質的に違います。

通常は、眼球から情報が入って、脳で処理されて、認識されていきます。弱視の場合は、主に脳から前の

部分にトラブルがあつて、情報が入りにくい状況なのです。大変なのはその状況の中で視覚の情報に基づいたイメージを頭の中に形成していかなくてはいけないところです。

同じ弱視でも、途中で弱視になった方とはこの点で全然違います。途中で弱視になった方は、視覚のイメージをよく見えていたころの知識を利用してとらえることができるのです。けれども、先天的に視覚に障害

のある子は、視覚のイメージがありません。それをいかに効率的に、豊かに作っていくかが教育の役割になっていきます。

——発達障害による見えづらさのほうは？

発達障害は、先天的な脳の障害で、情報はしっかりと目から後頭葉、そして側頭葉や頭頂葉にいき、文字を音に変えるなどの範囲で見えづらさがある。いろいろな状況があり一概には言えませんが、これらの脳の機能に問題を抱えていて、そのトラブルだと言われています。文字を構成する要素を合理的に解釈できない、位置関係がうまく処理できないので、文字を空間的にとらえにくい、書くのが難しいということが起きます。

弱視の漢字指導は二十年前から進歩していない？

——こういう子供たちは、読み、書きをどうやって学習していくのでしょうか？

書体の選び方も大事なところです。日ごろ、気にせずに使っている明朝体やゴシック体は、もともと読みのための書体なので、書く文字とは設計のコンセプト



●うじま・かずひと 1970年愛媛県八幡浜市生まれ。愛媛県立松山盲学校教諭、福岡教育大学講師、准教授を経て現職。日本ロービジョン学会理事、日本弱視教育研究会理事、視覚障害リハビリテーション協会理事。著書に『見えにくい子どもへのサポート Q&A』などがある。